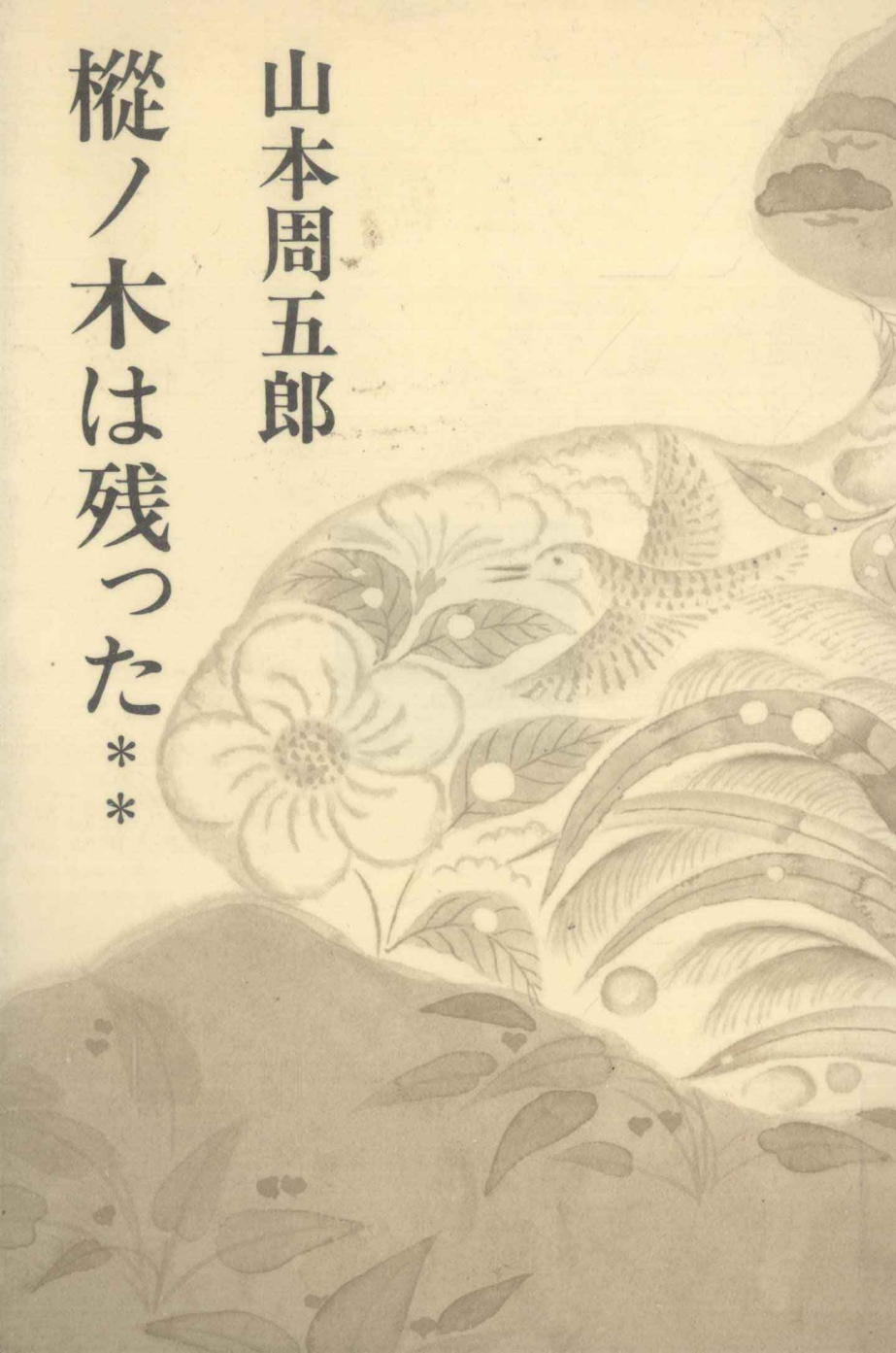


山本周五郎

樅ノ木は残った
**



縦ノ木は残つた**

山本周五郎

新潮社
版

© by Kin Shimizu.
Printed in Japan
1967

河盛好蔵
奥野健男 監修
土岐雄三

縦ノ木は残った** (山本周五郎小説全集9)

昭和四十二年六月三十日発行
昭和五十四年四月三十日二十六刷

定価 二二〇〇円

著者 山本周五郎

著作権者 清水きん

発行者 佐藤亮一

印刷所 三晃印刷株式会社

製本所 大口製本株式会社

発行所 株式会社新潮社

郵便番号 一六二

東京都新宿区矢来町七一

電話 業務部・東京(03)二六六―五一一

編集部・東京(03)二六六―五四二一

振替 東京八〇八番

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。



縦ノ木は残った

＊＊

第三部

川の音

七月中旬の午後、——ひどく暑い日で、風もなく、白く乾いた奥州街道を、西にかたむいた陽が、じりじりと照らしていた。

「そうだ、あいつだ」と伊東七十郎は歩きながらつぶやいた、「どこかで見た顔だと思ったが、たしかに彼に相違ない」

七十郎は、片方の手で額をぬぐった。手の甲に、べっとりと汗が付き、髪の毛の生え際には、汗が乾いて塩になっていた。着ている生麻の帷子も、袴も、汚れてほこりまみれで、菅笠をあみだにかぶり、彼は刀を肩にかついていた。刀には旅囊がひっ掛けてあり、その旅囊が背中へ触らないように、かついでいる刀をあんばいしながら、歩いていた。

そこは陸前のくに柴田郡の、岩入というところで、左に白石川の流れが見え、その流れはいま、街道とはなれつつあるが、広い河原をわたって、川の瀬音はまだはっきり聞えて来た。馬を曳いた農夫がゆきちがい、三頭の黒い牛を追って来た牛方とゆきちがった。三頭ともみごとな黒

牛で、埃をあげているのに、その毛はびろろのように艶つやと光り、そしてどの牛もずっしりと重おもしろく、王者のように重おもしろく、ゆっくりと歩き、通りすぎるときに、その一頭は、小さな眼で、七十郎を見た。

七十郎は立ちどまって、ほれぼれと牛を見おくれた。みごとだな、と彼は思った。みごとに堂々としている、あれは飼われるべき動物ではない。あのくらい牛になると、人間が飼うのは不自然だ、と思った。

牛はゆっくりと遠のいてゆき、その向うから、二人の供をつれた、旅装の侍が、こちらへ近づいて来た。

七十郎は松並木の影にはいり、そこにあった石に腰をかけた。旅囊を脇におろし、刀を両足の間に置き、菅笠をもつとあみだにして、額の汗を手でぬぐい、袴をくつろげた。——侍は近づいて来て、そこに七十郎のいるのを認めると、笠で顔を隠すようにしながら、前を通りぬけようとした。

「やあ、しばらくだな」七十郎は無遠慮に呼びかけた、「しばらくだな、渡辺七兵衛、休んでゆかないか」

侍は立ちどまってこつちを見た。それは渡辺七兵衛であった。彼は七十郎と同年配だが、四つ五つも年長にみえる。供の一人は万右衛門といって、これも七十郎には見覚えがあった。

「失礼だが、先をいそぐので」と七兵衛が云った。

「いそぐならいっしょにゆこう」と七十郎はすぐに立ちあがり、ふたたび旅囊を刀にひっかけ、肩にかついだ。

万右衛門がむっとした顔で七十郎をにらんだ。渡辺七兵衛は歩きだし、七十郎は彼と並んで歩

きでした。刀にひっかけてある旅囊が、七十郎の背中で揺れ、七兵衛の供の万右衛門が、うしろから肩をしかめながら、それをにらんでいた。

「どうせ船追で泊るんだろう」と七十郎が云った、「宿は柏屋か伊十か」

「船追で泊るとはきめていない」

「それなら泊ることにきめるさ、柏屋ではうまい酒を出す、おれが案内するよ」

「失礼だが」と七兵衛が七十郎を見た、「そこもとは、たしか」

「伊東七十郎だ、まさか、知らなかったんじゃないだろうな」

「たしか小野どのの」

「さよう、桃生郡小野の館主、伊東新左衛門の義理の弟だ、正確に言えば新左衛門の妻がおれの姉というわけさ、わかったかね」

「私はよく覚えていないのだが」と七兵衛は冷淡に云った、「これまでどこかで、正式に紹介されたことがあるだろうか」

「そんなことを気にするな」

七兵衛はまた振向いて、七十郎を見た。七十郎はあけっ放しな微笑で、彼に頷いた。

「気にするな、七兵衛」と七十郎は云った、「おれのほうではよく知ってるし、そっちだってまんざら知らないわけではないだろう」

「噂は聞いているようだ」

「噂だけか」

「伊達家の家臣でもないのに、よく藩邸へやって来て、誰の家へも平気で出入りするし、身分の高下を問わず友達あつかいをする、いったいどうして、誰があんな特権を与えたのか、——みんな

ながそう不審しているようだ」

七十郎はくすくす笑った。

「誰の家へでも、ということはないね」と彼は云った、「誰でも構わずということはない、おれはどっちかというと不拘束な人間だが、それでもわりかた性分は潔癖^{けつぺき}なんだ、友達あつかいをする値うちのある者は友達あつかいをするが、そうでないやつまで友達あつかいをするほど墮落^{だらく}してはいないよ」

「そうだとすると」と七兵衛が云った、「正式に紹介されたこともないのに、路上でいきなり話しかけたり、名を呼びすてにしたりするのは、どちらの意味だ」

「そんなことを気にするな」

「どちらの意味だ、友達あつかいか、それとも輕侮^{けいぶ}か」

「もうひとつつべつの意味だ」

七十郎はそう云って、振返って、うしろにいる万右衛門を見た。万右衛門はにらみ返し、七十郎は七兵衛に云った。

「だが、その話しはあとのことにしよう」

渡辺七兵衛が、同行を好まないことは、七十郎にもよくわかっていた。七兵衛の態度やその言葉つきで判断すると、いまにも「これで別れよう」と云いだしそうであった。だがそうはさせないぞ。七十郎はその隙^{すき}を与えなかった。彼は巧みに話を変え、いま三頭のみごとな黒牛がいったが、見なかったかと云い、その返事を待たずに、ああそうだと、高い声をあげた。

「こんど目付役にあげられたそうだな」と彼は七兵衛を見た、「目付役にあげられて、家禄^{かろく}も四百石あまりに加増されたそうじゃないか、出頭の祝いを述べなくちゃあいけないな、おめでと

う」

七兵衛は冷淡に会釈を返した。

——あまい野郎だな。

と七十郎は心のなかで思った。会釈の返しかたは冷淡だが、少なからず得意に感じたことは、その表情に隠しようもなく、あらわれていた。こういう単純さがもつとも危険なんだ。七十郎は続けて饒舌を弄しながら、心のなかでの「暗殺事件」を思い返していた。

万治三年七月十九日夜、伊達家の本邸と浜屋敷とで、四人の者が暗殺された。坂本八郎左衛門、畑与右衛門、渡辺九郎左衛門、宮本又市などで、名目は「上意討」であり、討手のうち明らかにわかつているのは、渡辺金兵衛（小人頭）渡辺七兵衛（同）そして小人の万右衛門の三人であった。事後、その趣意を料問されたとき、七兵衛らは昂然と「殿を悪所遊びに誘い、このたびの大事に至らしめた奸物だから、誅殺したのである」と述べ、なお、自分たちは身命を捨てて決行したもので、いかなる罪科を仰せつけられても満足である、と云ったという。

——こいつらはまじめだったんだ。

それが危険なんだ、と七十郎は思った。

坂本、渡辺、畑、宮本の四人が、家中の一部から佞臣といわれていたのは事実らしい。現に、陸奥守綱宗に遊蕩をすすめたのも、かれら四人だったということだ。だが、この四人のうしろに一ノ関（兵部宗勝）がいた。かれら四人は一ノ関のひく糸によつて踊った木偶にすぎない。そしてまた、七兵衛らに四人を暗殺させたのも、一ノ関その人であった。一ノ関その人であると、七十郎は認めていた。

四人を使喚して綱宗に遊蕩をすすめ、かれらを使喚したという事実、を湮滅するために、七兵

衛らを煽動してこれを暗殺した。

——みんな兵部少輔宗勝の仕事だ。

と七十郎は心のなかでつぶやいた。暗殺事件について、評定がおこなわれたとき、七兵衛らを「忠誠の士」である、と主張したのは、兵部宗勝であった。それだけでも、事の真相は歴然たるものだが、こいつらは真相を知らず、自分ではまじめに忠誠の士だと信じている。こういうばか者には、一本みまうてやらなければならない。

——面上へ一本、骨にこたえるやつをみまうてやろう。

と七十郎は思った。かれらは歩いてゆき、七十郎は活潑にしやべり続け、七兵衛はその饒舌にひきつけられていた。渡辺七兵衛を軟化させるくらい、七十郎にとってはどうさのないことで、船迫に着いたときは、もうなんの異議もなく、柏屋という宿へいっしょに草鞋をぬいだ。

風呂で汗をながし、着替えをしてから、中庭に面した座敷で、二人は酒を飲んだ。七兵衛はたいそう機嫌をよくし、酒が進むと、自分はそこを誤解していた、と釈明した。

「人間はよく話しあつてみなければわからないものだ」と七兵衛はきまじめに云った、「私は人の評に誤られていた、私は伊東どのをまったく違つた人柄のように思いこんでいた」

「おたがいさまだ、気にするな」と七十郎は云った、「それから他人行儀などの付けはよそう、おれも呼びすてにするから、そつちも呼びすてにしてくれ、今日はゆっくり飲んで話そう」

「私は酒には強くないのだ」

「刀法では強いだろう、酒なんか弱くつたつて卑下するには及ばないさ、一ついこう」七十郎は酌をしてやつた、「ときに、——供の一人は万右衛門という男じゃあないか」

「知つておられたのか」

「小人の万右衛門といえ、あの事件で剛勇の名が高かった、ひとつここへ呼んでいっしょに飲むとしよう」

七兵衛は手を振った、「せっかくではあるが、あれは少し酒癖が悪いし、供の者を同座させることは」

「作法のやかましい人だな」と七十郎は笑った、「では河原へゆこう、やがて月も昇るだろうし、まだ河鹿が聞けるかもしれない、河原なら万右衛門も同座していいだろう」

「そういう酒はまだ飲んだことがないのだが」

「ではきまった、支度をさせよう」七十郎は宿の者を呼んだ。

酒とさかなを宿の者二人に持たせ、万右衛門を伴れて、かれらは白石川の河原へいった。

白石川は夏涸れで、水が少なく、乾いた大きな石の、いちめんころがっている広い河原を、水は幾条かに割れたり、大きく蛇行したりしながら流れてい、それでも遠く近く、かなり高い瀬音が聞えていた。かわらよもぎに囲まれた、小石まじりの、平らな場所に席を占め、酒肴をひらいて、三人は飲みだした。――昼の余温が残っていて、そこはまだ暖かく、宿の者はかわらよもぎをむしり取って、蚊いぶしをした。あたりはすっかりたそがれて、川のかなたに船岡の町の灯が見えていた。砦山は黒く、原田家の館のある丘は、ぼろと宵闇に溶けて、もうそれと判別がつかなかった。

「河鹿の声がしないようだ」と七十郎が宿の者にきいた。

宿の者は、月はじめまでは鳴いていたが、と答えた。去年の秋、上流の濁川が荒れて、このあたりの川床もだいぶ変った。そのために河鹿も少ないのかもしれない、と宿の者は云った。

「万右衛門、遠慮なくかさねろ」と七十郎は宿の者の話すのを聞きながして、瓢の酒を万右衛門

にすすめた。かなりな大盃で、万右衛門は七兵衛の顔色をうかがいながら、むつつりと、黙って飲んだ。

「おまえの手柄は聞いているぞ」と七十郎は云った、「三年まえの七月十九日の夜だ」

「その話はやめてもらいたい」と七兵衛が云った。

「謙遜するな」と七十郎が笑った。七兵衛がいやと首を振った、「いや、その話は困る」

「どうして、三人はみごとにやったし、忠誠の士だという金看板も付いた、なにも謙遜には及ばないじゃないか」

そして片手で膝を打ち、忠誠の士か、ふん、と鼻を鳴らした。七兵衛は穏やかに、あのときのことは聞きたくない、せっかくの酒がさめるから、ほかの話にしよう、と云った。

「じゃあ、一ノ関の話でもするか」と七十郎は云った、「そうだ一ノ関がいい、その話ならあの晩の出来事とも無関係ではないからな、ではまず一杯、——」

渡辺七兵衛の顔に、かすかながら警戒の色があらわれた。七月十九日夜の出来事をもちだし、兵部宗勝に話を転じ、その二つが無関係ではない、という口ぶりに、棘を包んだようなものが、感じられたのである。七兵衛はさりげなく話題を変えようとし、伊東どのの在所はどこであるか、と訊いた。

「また避けるね」と七十郎が云った、「どうしてあの事になると話を避けるんだ、なにか心に咎めることでもあるのかね」

「つまらないことを云う」と七兵衛は苦笑した。

「おれはつまらなくないんだ」と七十郎は云った、「つまらないどころか、おれはひじょうに興味をもっているし、あの件についてはまだ知りたいことがたくさんあるんだ」

すると七兵衛は肩を固くし、顔を硬こわばらせ、しかしまだ怒りは抑おさえながら、七十郎の言葉を遮さへぎって云った。

「そういう話しは聞きたくない、もしもやめないのなら、私は宿へ戻る」

「事実を知るのが怖おそろしいのか」

「風説は事実ではない、そのもとの知っているのは単なる風説だ」

「証明することができるか」

「そちらはどうだ」

「おれか、おれはできるさ、口で証明するだけではない、ちゃんと証人までいるよ」と七十郎は微笑し、「そこにね」と云って七兵衛と万右衛門を指さした。手をあげて、真正面から、七兵衛を指さし、万右衛門を指さした。

「私がなんの証人だ」と七兵衛がどなり、七十郎は、怒るな、怒ると損をするぞ、と冷笑した。

「私がなんの証人だというのか」と七兵衛は叫んだ。

「絵解きをするかね」と七十郎が応じた。彼の唇にはまだ冷笑が刻まれており、その眼はするどく、七兵衛の面上に射込まれていた。

「おまえはさっき、——私は人の評うつきに誤られていたと云った、人の評を信じて、この七十郎を誤解していたと云った、それと同じことを三年まえにやったんだ、渡辺七兵衛は兵部宗勝に焚たきつけられ、真偽をたしかめもせず、逆上して屠殺者を買って出たのだ」

「屠殺者だ」と七兵衛は口をあき、そして嚇おそとなった、「われわれを、屠殺者だと、いうのか」

「なかんずくおまえは、だ」と七十郎は声をおとして、忘れたのかと云った、「いつかの夜、一ノ関の屋敷の外でも、おまえは人を斬きろうとした、兵部を訪たずねたなにがしとかいう浪人を、命ぜら

れて斬ろうとし、闇討ちを仕掛けた、そうだろう」

七兵衛は口をあいたままで、とび出すほど大きく眼をみはり、右手では反射的に、脇わきに置いてある刀をつかんだ。

「そうだろう七兵衛」と七十郎は続けた、「きさまは兵部に命ぜられて、罪の有無もわからない浪人者を斬ろうとした、きさまは罪の有無を知らなかった、ただ兵部の言葉を信じ、兵部の命にしたがって斬ろうとした、坂本、畑ら四人もそうだ、きさまは相手の罪科を知らず、自分には斬る理由もなく、他の煽動せんどうに乗ってすぐに人を斬る、こういう人間を屠殺者というのだ、渡辺七兵衛、きさまそれでも屠殺者ではないか」

七兵衛は無礼者と叫び、刀を、左手に持ち変えながら立った。蚊いぶしをしていた宿の者は、二人とも、仰天ぎょうてんして脇へとびのき、七十郎は静かに立ちあがった。東の遠い山の上に月が出ていて、川波が光り、せせらぎの音の中に、河鹿の声が一つだけ聞えた。七十郎は眼の隅すみで、万右衛門が刀の柄つかに手をかけるのを見ながら、自分は左手に刀をさげたまま、七兵衛に向かって、抜くまえに考えろ、と云った。

「兵部邸の外であったことを忘れるな、あのときおれが声をかけなかったら、きさまはあの浪人に斬られていたぞ」

七兵衛は立っていて、万右衛門が抜いた。万右衛門の手に、きらっと刀が光り、七十郎がそっちを見た。万右衛門は月に正面してい、肉の厚い大きな顔の、太い眉と、白い歯とが見えた。

「刀は抜いたときが勝負だぞ」と七十郎が云った。

万右衛門は動かず、七十郎はじつと彼をにらんで、それから微笑しながら、宿の者の一人に、「おい佐平、この二人を宿へ送ってゆけ」と云った。万右衛門が動いた。七十郎は彼を見た。五

拍子ばかり万右衛門をみつめていて、それから、棒立ちになっている七兵衛に眼をやり、静かに元の場所へ坐りながら、「伊助はここへ来て酌をしろ」と云った。

宿の者の一人が、近よって来た。

「こうなると主持ちあるじは哀れだ」と七十郎は盃さかずきを取って、くすつと笑いながら云った、「おれは斬っても斬られても、迷惑する者も泣く者もない、ところが扶持もちを貰い、家族縁類があると、そうはいかないからな、——おい佐平、二人を送ってってやれ」

「万右衛門、刀をおさめろ」と渡辺七兵衛が云った。彼は、こっちへ背中を向けている七十郎をにらみ、それからぎごちない口調で訊いた。

「別れるまえに、もう一つ聞いておこう」

「伊助、酒を注げ」

「私が証人だという意味を聞かせてくれ」

「自分でわかる筈はずだ」

「そこもとの口から聞きたい」

「頭の悪いやつだ」と七十郎は振返って云った、「おまえは自分でしたことがなんであったか、もうとつくに感づいているだろう、坂本たち四人を斬ったことも、兵部邸の外で浪人者を斬ろうとしたことも、——それが忠誠のためではなく、兵部宗勝その人のためであり、自分は単に煽動され利用されたにすぎない、ということをおまえ自身とつくに感づいている筈だ、そうではないか」

「なぜ私が感づいていると思うのか」

「そこまで自分をばかにするな」と七十郎が云った、「感づいていなければおれを斬る筈だ、も

ちろん、おれは斬られはしないがね、しかしおまえが刀を抜けなかったのは、おれの云ったことに思い当るふしがあったからだ、もっと詳しく聞きたいか」

「もう充分だ、また会おう」

「たくさんだ、会う必要はない」

「いや会おう」と七兵衛は云った、「そこもとの思案は聞いた、私には私の思案がある、こんど会ったときには、私の思案を聞いてもらおう」

「たくさんだ、おれにはそんな暇はない」

そして七十郎は手を振った。宿の者の佐平と共に二人は去り、七十郎は伊助という若者と、そこに残った。

——颯爽たるものだな。

という声が聞えた。

——颯爽たるものだ、七十郎、いい気持ちらしいな。

それは七十郎の頭のなかで、冷笑するように聞え、その声の主の顔までが見えた。その声は原田甲斐宗輔かいむすけの声であり、その顔はなごやかな、しかし皮肉な、微笑をうかべていた。七十郎は恥ずかしさのあまり嚇おそとなった。

「原田ごときがなんだ」と七十郎は思わず云った、「あのくわせ者が、——」

伊助という若者はびくつとし、脇から、おそるおそる彼の顔を見ていた。川の瀬音が高く、河鹿かの声が一つだけ、まをおいて、ときに低く、ときに音を張ねって、聞えて来た。七十郎は強く頭を振った。いま見えた人物の幻像を、うち消そうとでもするように。それから酒を呷あって、呟つぶいた。